# 佐賀市
# 松原の歴史展

ここ佐賀市松原は、駅や市街地と城内をつなぐ、まちの大事な結び目です。佐賀城北堀に影を映す松原神社・佐嘉神社や徵古館は地域の歴史を物語る存在であり、開放感に包まれるくすかぜ広場（ARKS）や神社周辺の蒼い樹々、松原川の澄みきった流れという自然環境にも恵まれています。

鍋島報效会は昭和15年の鍋島家による創設以来、旧藩主家として地域に報いる（報效）ため徵古館運営を中心とした活動を松原の地で行っています。徵古館周辺の松原公園は、平成23年に佐賀市が設置した都市公園です。佐賀市と鍋島報效会（徵古館）は平成31年に「まちづくりに関する基本協定書」を締結し、相互に連携・協力し、鍋島家ゆかりの歴史的・文化的資産を活かしたまちづくりを推進しています。

現在、佐賀市では、「松原公園周辺における歴史と文化を活かしたまちづくり懇話会」を設置し、歴史的・文化的エリアである松原公園周辺のあり方等について意見交換を行っています。そこで、この松原の歴史等を広く知ってもらいたいとの思いから、江戸時代から現代に至る松原の歴史をパネルでお伝えする「佐賀市松原の歴史展」を開催する運びとなりました。松原という土地が担ってきた役割や価値を広く知っていただくことが、今後の佐賀のまちづくりにつながれば幸いです。

最後に、本展にご協力いただきましたNHK佐賀放送局、佐嘉神社・松原神社はじめ関係各位に感謝申し上げます。

佐賀市
公益財団法人鍋島報效会

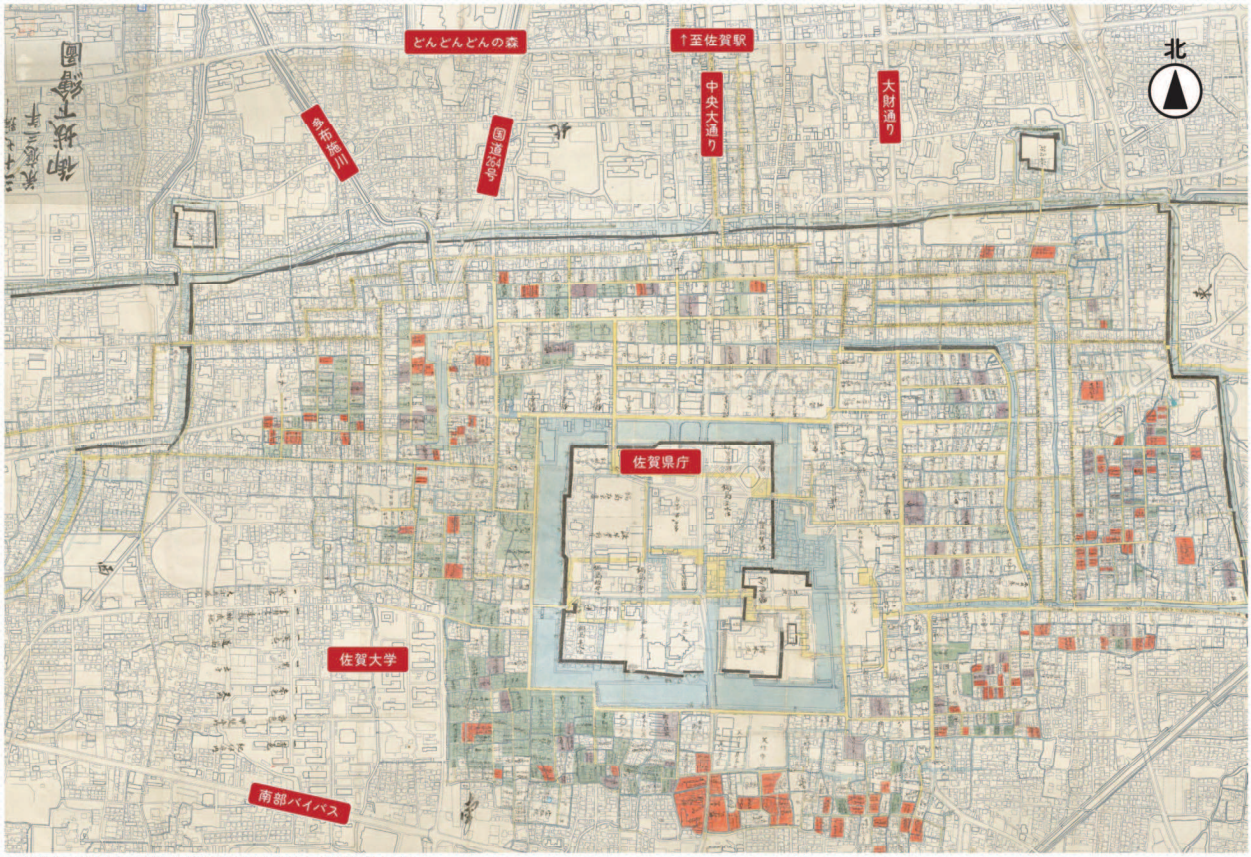
# 佐賀城下はどうやってできた？

**元々は海 → 陸地化 → 集落 → 中世の町 → 江戸時代の城下 → 現在の佐賀市**

佐賀のまちは、元々は海でした。それが、海から泥土（でいど）、川から土砂が運ばれて次第に陸地化してできたのが佐賀平野です。そしてこの土地に人が住み、産業が営まれたことが、私たちの佐賀市の発展につながりました。

人々が田畑を協働で開墾するようになると、各地に小さな集落が発達します。中でも中世の時代に田畑を管理する地頭（じとう）として成長した龍造寺氏（りゅうぞうじし）は、戦国時代に村中城（むらなかじょう）や水ヶ江城（みずがえじょう）を拠点に、周囲に家臣の屋敷や寺院のある小さな城下町を作りました。

さらにそれを拡張する形で、江戸時代のはじめに鍋島氏が道路や水路網、武家屋敷などを整備してできたのが佐賀城と佐賀城下です。江戸時代のおよそ260年間、佐賀城下の形はほぼ変わらず維持され、これを基盤として明治時代以降の150年間で四方に拡張したのが現在の佐賀市です。




承応佐賀城廻之絵図（現代地図との重ね図）承応3年（1654）
鍋島報效会（徴古館）所蔵

# 佐賀城下はどこを向いている？

**佐賀城下は北を重視して設計されたまちです。**

正方形のお堀に囲まれた佐賀城を中心とし、左右対称に広がっているのが佐賀城下の特徴です。海が徐々に陸化した平地のため、自由な設計が可能でした。

しかし、まちの重要度は均等ではなく、実は北側が最も重視されていました。藩の政治を行う本丸や二の丸が南端に位置する佐賀城は、南を背にした北向きの城と言えます。長崎街道も北寄りに設定され、まち全体を取り囲む十間堀は北の山からの水を受け止めます。出城の機能をもつ寺院（清心院と天祐寺）の位置から、軍事的にも北向きの備えが重視されていたことがわかります。有明海が近い南側にはその必要はありませんでした。

佐賀城の正門は北御門です。北御門から、大事な北側に展開する北御堀端小路や松原小路などの武家地一帯が、現在の佐賀市松原です。近代以降も鉄道や高速道路、サンライズパークなど、まちは城下のさらに北側へと広がっています。

文化御城下絵図 文化7年（1810）頃
鍋島報效会（徴古館）所蔵

# どうして佐賀市「松原」と呼ばれるの？

**江戸時代から松などの樹木が生い茂る土手があり、これが「松原」と呼ばれていたことが地名の由来です。ではどうして、お城に近い「一等地」なのに宅地開発されなかったのでしょうか。**

江戸時代、他藩の人々は城下の武家地内への立ち入りは制限されており、往還（おうかん）や街道筋だけを通行することができました。

松原は、本丸・二の丸の真北に位置していることから、その延長線上の川上往還（かわかみおうかん）や長崎街道から城内が見通せないようにする、目隠しの役割があったとも言われています。

江戸時代の書物※には龍造寺氏の時代について、「城の表門は現在の（江戸時代の）倉町鍋島家の門の辺り、裏門は松原小路の現在の野口新右衛門らの屋敷辺りだった。だから（城の表門と一体的な防衛施設である）土手の跡が残っている」と記されています。

龍造寺氏の時代のお城や城下町の明確な範囲は分かっていませんが、その北限が松原であり、城下町が広がった江戸時代にも、いわば史跡として保存されたのかもしれません。

※「多久家書類」鍋島報效会所蔵／佐賀県立図書館寄託（鍋島家文庫）

元文佐賀城廻之絵図　元文5年（1740）
鍋島報效会（徴古館）所蔵

# 生活の水はどうもたらされた？

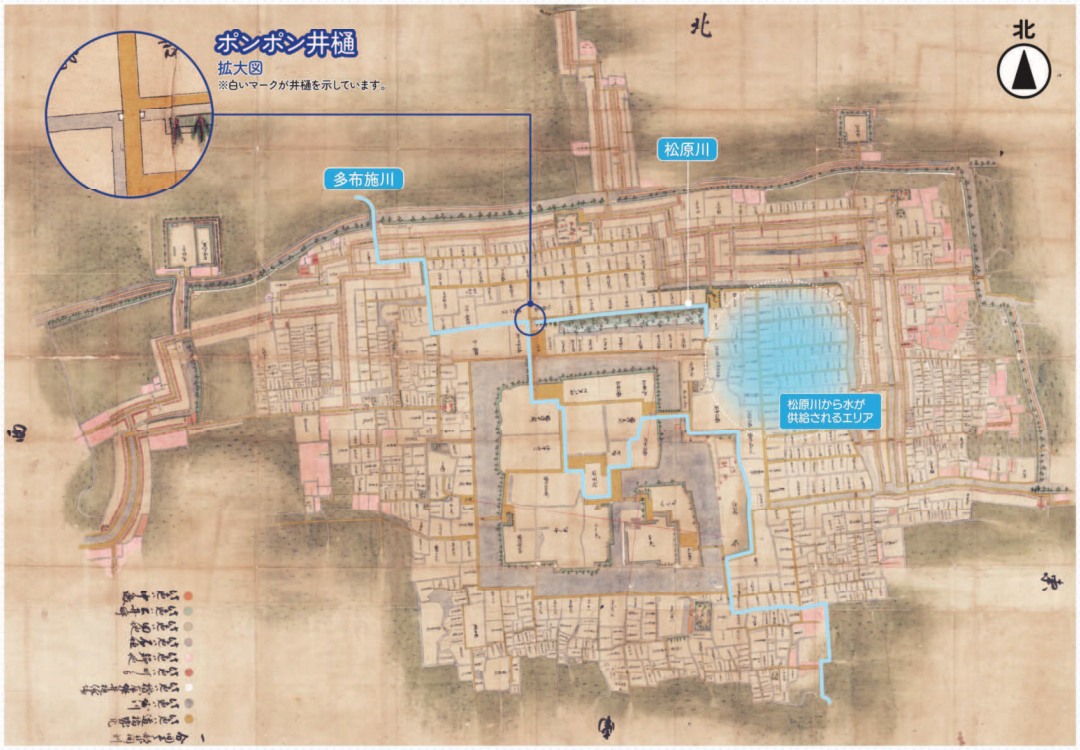
**藩により川と水門、水路網のシステムが整備され、住民により維持され、水の供給に松原川も大きな役割を果たしました。**

江戸時代の佐賀城下は、武家地が約1,000世帯あり、町人地には約14,000人が住む大都市でした※。多布施川（たふせがわ）を通じて城下に運ばれた水は、水路網の仕組みによって城下の域内にくまなく供給されました。

多布施川から水を供給する12ヵ所の水門（井樋（いび））のひとつが「ポンポン井樋」です。井樋を通じて石組みの底から水が「ポンポン」と音を立てて流入するこの井樋が松原川の源流です。「松原」（土手）のそばを東進し松原神社の脇で流れを変えつつ、小さな井樋と水路を通じて各屋敷に水が配られました。

水路の底に溜まった土砂を浚（さら）う作業は住民の義務で、怠れば武士は給与から天引きされる罰則規定もありました。水路で繋がる水は、みんなの共有物です。江戸時代のはじめに藩が整備した川と水門、水路網のシステムを、住民が共働して維持をしていくという営みが大都市の暮らしを支えました。

※「竈帳」 嘉永7年（1854） 鍋島報效会所蔵／佐賀県立図書館寄託（鍋島家文庫） 三好不二雄・三好嘉子編『佐嘉城下竈帳』九州大学出版会、平成2年




元文佐賀城廻之絵図 元文5年（1740）
鍋島報效会（徴古館）所蔵

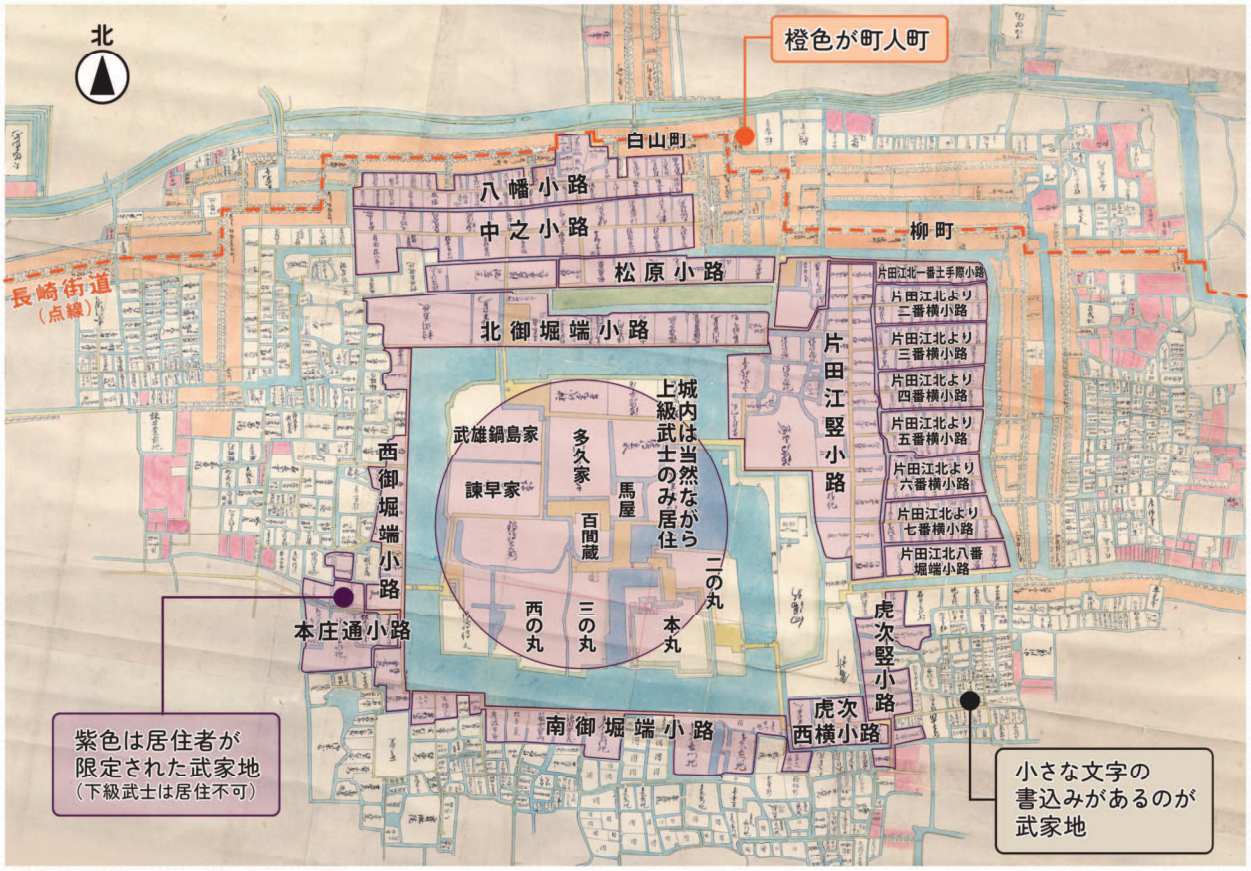
# 松原周辺には どんな人が住んでいた？

**松原周辺は中級以上の武士だけが住むことができる、城下の中でも格式の高い場所のひとつでした。**

城下にあった約1,000ヵ所の武家屋敷は、「○○小路」と呼ばれる約100の小区画に分かれていました。城堀に面して「北御堀端小路（きたおほりばたこうじ）」があり、松原川を挟んでさらに北側に松原小路・中之小路・八幡小路の順に広がっていました。

北御堀端小路は道路幅が約10mあり、その北側に白壁の塀をもつ屋敷が建ち並んでいました。中には藩の米蔵や訴訟を扱う評定所（ひょうじょうしょ）などの公的機関もありました。現在の徴古館の場所には10代鍋島直正公の側近をつとめた鍋島市佑（いちすけ）（夏雲（かうん））という上級武士も住んでおり、その屋敷地は約4,600㎡（約1,400坪）もありました。

お城に近いこれらの小路には中級以上の武士だけが住むことができ、松原周辺は城下の中でも格式の高い場所のひとつでした。




文化御城下絵図（周辺部は一部カット）（1810年頃）
鍋島報效会（徴古館）所蔵

# 6 どうして弘道館は松原にできた？

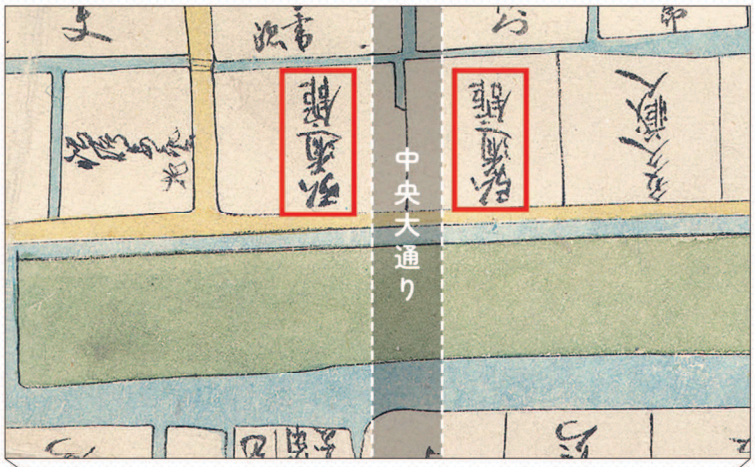
**各地から集まりやすい場所だったため。**

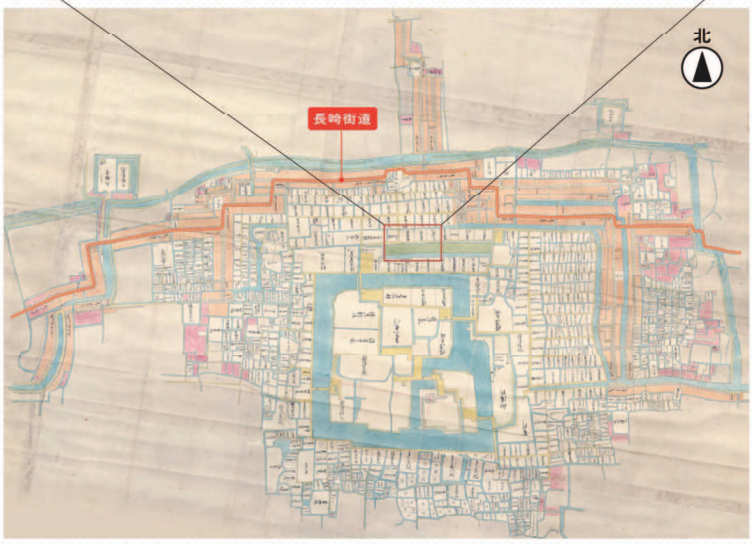
江戸時代は、藩政を担う武士の組織的な教育が必要でした。当時の政策意見書※に、藩校を「四方より懸かりよき場所」（各地から集まりやすい場所）に作るべきとあり、用地選定の結果、天明元年（1781）に藩校弘道館が松原小路に創設されました。現在のバルーンミュージアムと、中央大通りを挟んだその西側です。

清らかな松原川のほとりの弘道館は「松水黌」とも呼ばれました。のち天保11年（1840）には松原川を挟んだ南側に移転・拡張しました。物ぐさな副島種臣は学生時代、松原川で濡らした指先を目元に当てるだけで朝の洗顔を済ませたというエピソードも伝わっています。

松原地区は、幕末から現代にかけて「教育・歴史・文化ゾーン」の性格を色濃くしていきますが、その端緒は弘道館ができた、つまり松原が佐賀の人たちにとって集いやすい場所だったことに起因すると言えるでしょう。

※「御仕組八ヵ条」鍋島報效会所蔵／佐賀県立図書館寄託（鍋島家文庫）




文化御城下絵図　文化7年（1810）頃
鍋島報效会（徴古館）所蔵

# 藩祖を祀る「日峯社（松原神社）」は、なぜここに？

**もともと、ここに小さな石祠があったことがきっかけです。**

佐嘉神社の東側に位置する松原神社。安永元年（1772）に8代藩主鍋島治茂公が藩祖鍋島直茂公（法名：高傳寺殿日峯宗智大居士）を祀るため「日峯社」を創建し、日峯明神（のちに大明神）として崇めたことに始まります。

ご創建にあたり、この松原の地が選ばれたことには理由があります。当時、新しく神社を作ることは幕府によりご法度でしたが、「松原（土手）」に生えていた大楠の根元にはもともと石の祠がありました。そこで、新しく建てるのではなく既存の祠をもとにする形でお宮が建てられ、日峯社が創建されました。

「松原（土手）」は龍造寺氏時代の土手の痕跡（史跡）として保存されたとも考えられることから、藩祖を祀るにふさわしい場所とされたのかもしれません。長崎街道から150mほどに位置し藩内各地から参拝しやすく、藩主も参勤交代時に立ち寄るのが恒例でした。

鍋島直茂像
鍋島報效会（徴古館）所蔵

松原神社

# 松原はいつから人の集う場所に？

**日峯社ができた直後から出店が立ち始めました。**

Q：日峯社ができて間もないころ、城下に住む茂兵衛という人物から、門前に茶屋を出店したいという請願が藩に出されました。「大切なお宮の門前ですから粗末な商品は取り扱わず、周辺の掃除も行います」とのことで藩は許可しました。

ところがその後、「日峯社の門前の掃除が不行き届きである。大事なお宮だから周辺が見苦しくてはならない。今後は社人から出店者に命じてきちんと掃除させるように」と藩から命令が出されています。※

やがて門前には石づくりの鳥居が建ち（現存）、直茂公没後200年にあたる文化14年（1817）には参道（新馬場）が拓かれ、このとき千栗土居の杉材で木製鳥居や銅の鳥居も建立されました。

お宮ができ、次第に参道や門前も整備され、参拝者が集うとともに商いの場も生まれました。のちの時代に新馬場には旅館、周辺には映画館など娯楽施設が軒を連ねる松原周辺の賑わい端緒は日峯社にあったと言えるでしょう。

※「泰国院様御年譜地取」鍋島報效会所蔵／佐賀県立図書館寄託（鍋島家文庫）

現在の大財通りから松原神社方面を見た明治時代の参道（新馬場）の様子。両脇には旅館などが建ち並び人力車が見える。

『明治銅版画　佐賀縣獨案内（復刻版）』青潮社、昭和58年
原本は中谷與助編『佐賀縣獨案内』（一名商工便覧）明治23年、龍泉堂

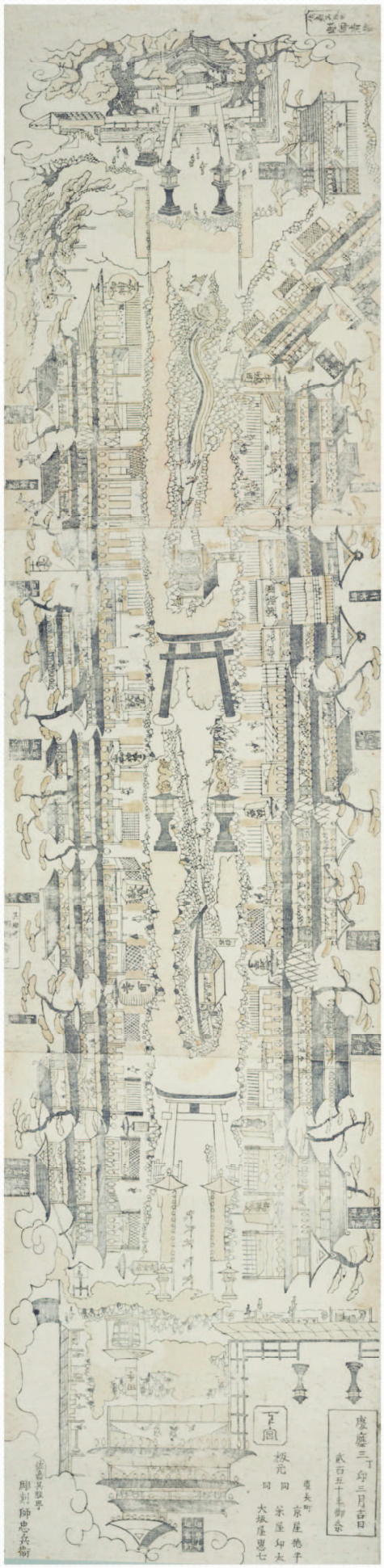
# 賑わう新馬場。何が行われているの？

**藩祖鍋島直茂公
没後250年を記念した祭礼です。**

慶応3年(1867)、直茂公の没後250年を記念し、日峯社の参道にあたる新馬場で祭礼が催されました。右の図は、その様子を表した版画です。図の上端には本宮、下端には下宮が描かれ、間をつなぐ参道の両脇には「牛嶋町」「長瀬町」「八戸町」など各町が競って桟敷を設けており、大きな獅子や、米俵をのせた船を曳く行列が練り歩くなど大変賑わっています。

当時の藩主鍋島直正公も近くの欄干御茶屋に赴き、お子様方と一緒に祭礼の様子を観覧しました。

普段は質素倹約を励行し、またお祭りが少ないとされる佐賀城下ですが、大きな祭礼の折には役人から「自由に祭礼飾りをしてよい」とのお達しが出て町人たちが大騒ぎになるなど、神社を核に松原の地で藩主から町人まで一体となって奉祝ムードを盛り上げました。



藩祖直茂公二百五十年祭礼之図
慶応3年(1867)
佐賀県立図書館所蔵

にっぽうしゃ

# 「日峯社」から「松原神社」へ

**直茂公の奥方と祖父、さらに龍造寺・鍋島両家を祀る神社に。**

江戸時代後期の安永元年（1772）に藩祖鍋島直茂公を祀る神社として創建された「日峯社」ですが、直茂公没後200年の節目にあたる文化14年（1817）には、直茂公の正室・彦鶴（陽泰院）さまと祖父・清久公も合祀され（一緒に祀られ）ました。

明治時代に入ると、日峯社はさらに大きく変わっていきます。明治5年（1872）には、直茂公の息子である初代藩主鍋島勝茂公が合祀され、翌6年（1873）には龍造寺隆信公、政家公、高房公の三代を祀るお社（敷山社）が金立から松原に遷座され北殿に祀られました。また、南殿には10代藩主鍋島直正公が祀られることとなり、この年から「松原神社」と呼ばれるようになりました。

松原神社は佐賀城下で唯一、郷土の歴史上の人物を御祭神とするお宮として松原の地で変遷を遂げました。

（左上）龍造寺隆信像、（右上）鍋島直茂像
（左下）鍋島勝茂像、（右下）鍋島直正像
いずれも鍋島報效会（徴古館）所蔵

# 近代の松原はどんな町並み？

**市役所や物産館、公会堂（こうかいどう）などが建ち並び「佐賀丸の内」と呼ばれました。**

廃藩置県後に併合（へいごう）を繰り返した佐賀県は、明治16年（1883）に再設置されました。庁舎は松原に置かれましたが、明治20年（1887）に現在の場所（城内）にできた新庁舎に移転しました。

北堀を挟んで向かい合う松原の地には、佐賀市役所（昭和4年／現在のARKS）、物産陳列館（大正2年／現在のNHK佐賀放送局）、佐賀市公会堂（大正15年／現在の中央郵便局～徴古館駐車場）などが建ち並び、一帯は「佐賀丸の内」と呼ばれるほどでした。

元はもっと東にあった市役所は、大正2年の直正公銅像の建立にあたって敷地を譲り、西側（現在のARKSの場所）に移転しました。落成式で当時の野口市長は「四方八方からの街路に面している」という利点を挙げています※。江戸時代より「四方より懸（か）かりよき場所」（各地から集まりやすい場所）とされた松原という絶好の地をめぐり、行政機能と、歴史を顕彰する場や神社という祈りの場が互いに譲り合い共存しながら、ひとつの「佐賀」というまちづくりが目指されました。

※「佐賀市史」上巻、佐賀市役所、昭和20年

佐賀名所絵はがき
佐賀県立図書館所蔵

# 銅像園のはじまりはいつ？

**1913年にこの松原の地に直正公銅像が建立されたことをきっかけに、周辺一帯は銅像園として整備されました。佐賀図書館、弘道館記念碑、徴古館、佐嘉神社などが次々と建設されます。**

10代佐賀藩主鍋島直正公の生誕から100年を迎えた大正２年（1913）、佐賀県民及び佐賀県出身者の寄付により直正公銅像が建立されました。高さ4メートルを超える巨像として、直正公は松原の地から佐賀を見守っていました。11月10日、佐賀県民待望の銅像除幕式が執り行われ、銅像の周りには多くの県民・市民が集まりました。

銅像建立の返礼として、11代鍋島直大公（直正公長男）は銅像除幕式の日に佐賀県内最初の公共図書館「佐賀図書館」を落成させました。佐賀県の文教発展のため、直正公が教育にかけた意志を受け継いで利用してほしいとの直大公の願いが込められています。

こうして、銅像建立を契機に松原一帯は銅像園として発展していきます。

銅像除幕式当日の様子。多くの人が参集している。
銅像除幕式写真　大正2年（1913）撮影　鍋島報效会（徴古館）所蔵

銅像の左手の建物が佐賀図書館
銅像園絵葉書　大正2～5年頃撮影　鍋島報效会（徴古館）所蔵

ちょうこかん

# 徴古館ってなんだろう？

**「徴古館」は、1927年10月、直正公銅像の南側に開館した佐賀県内初の博物館です。**

直正公銅像、佐賀図書館に続いて、大正12年（1923）には銅像園の一画、弘道館（こうどうかん）跡地の東端にあたる位置に「弘道館記念碑」が建立されました。建立は有志の団体「弘道館記念会」によるもので、題字は12代鍋島直映（なおみつ）公の手になります。さらに同会は「弘道館記念館」の建設を計画しますが、昭和2年（1927）直映公による徴古館の建設により目的は叶えられたとして同会は解散し、記念碑は徴古館に寄附されました。

徴古館の開館式で当時の大島佐賀県知事は「官民一体となり徴古館を活用して佐賀発展の基盤としたい」と述べ、野口佐賀市長は「郷土の歴史を伝えるのは市長の責務。徴古館の充実は郷土に多大な効果をもたらす」と述べました※。松原の地で歴史を伝えることに市民や各団体、鍋島家や行政が共に期待を寄せる気運の中でこそ、県内初の博物館「徴古館」は誕生したのです。

徴古館では県内各地の各家から広く歴史資料が出品され、肥前史談会など市民文化団体の活動拠点にもなりました。

※「旧佐賀藩弘道館記念誌」第二輯、弘道館記念会、昭和3年

現在も徴古館の隣に建つ弘道館記念碑

開館式の徴古館前。中央が創設者の12代鍋島直映公 昭和2年10月撮影
鍋島報效会（徴古館）所蔵

開館当時の徴古館
鍋島報效会（徴古館）所蔵

# 佐嘉神社の御祭神は？

**佐嘉神社は10代鍋島直正公と11代鍋島直大公を御祭神としています。**

現在でも佐賀市内外から多くの人が訪れる佐嘉神社は、鍋島直正公を祀る神社として創建されました。

昭和5年（1930）に造営に着手し、上棟式の餅投げには多くの市民が集って盛り上がりを見せていた様子が写真から分かります。そして昭和8年（1933）9月23日に遷座祭が催行され、直正公の御霊代が松原神社から佐嘉神社へ御遷座されました。

佐嘉神社は、国家的功績のあった人物を祀る別格官幣社という社格でした。10月12日には列格奉告祭が催行され、翌日から3日間一般祭典が開催されました。市内では武道大会や花火大会、展覧会、市内小学生徒による組体操など様々なものが催され、大いに賑わいました。

令和5年（2023）、御創建90年を迎える佐嘉神社は、今も市民の憩いと祈りの場であり続け、直正公とのちに合祀された直大公は、変わらず松原の地から佐賀のまちを見守り続けています。

上棟式「投銭投餅ノ儀」の様子

創建当初の佐嘉神社
いずれも『佐嘉神社記念寫眞帖』より

佐嘉神社正門前の雑踏

# 昭和10年頃の松原の様子は？

**銅像園として整備された松原の地は
県内随一の「歴史・文化・祈りの中心地」として発展しました。**

直正公銅像の建立からはじまった銅像園の整備は、昭和8年(1933)の佐嘉神社の創建により完成します。

昭和10年代の様子を撮影した写真が残されています。

銅像園の様子　昭和10年代
鍋島報效会（徵古館）所蔵

写真の中央右寄りに佐嘉神社があり、左側には徵古館（ちょうこかん）と弘道館（こうどうかん）記念碑が現在と同じ場所に建っています。徵古館の左奥には佐賀図書館、右には直正公銅像があります。写真手前に広がる北堀には蓮が群生し、ボートもたくさん繋がれています。昭和7年（1932）から貫通道路も整備され、人や車の往来も増えました。

「佐賀丸の内」と呼ばれた官公庁群に加え、銅像園が整備されたことで歴史（直正公銅像・弘道館記念碑）を核として、文化（図書館・徵古館）、祈りや安らぎ（松原神社・佐嘉神社）の中心地となりました。

# 戦中・戦後 松原はどうなった？

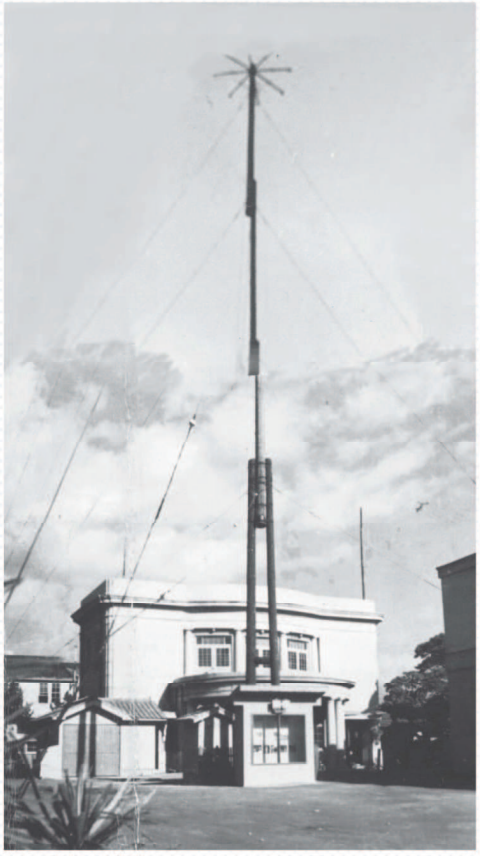
**直正公銅像は供出され徴古館は閉館。
銅像園は戦地引揚者の生活の場に供され、
松原は時代の変化に応じた役割を果たしました。**

第二次世界大戦の時代。金属回収により、昭和18年（1943）に徴古館収蔵の機械金属品、弘道館記念碑の鉄柵、直正公銅像の付属金物、松原神社の銅製鳥居や灯籠までもが供出（きょうしゅつ）されました。翌年には銅像本体の金属供出のため直正公は「出征（しゅっせい）」し、時局の変化により徴古館での博物館活動も中止されました。

戦後まもない昭和23年(1948)の地図（パネルNO.20）には、銅像や徴古館の名は見えません。旧銅像園一帯は戦地から引き揚げた人々の生活の場となり、様々な店舗が軒を連ねる「松原マーケット」が自然と形成されました。時代の変化によって求められる役割に応えてきた松原という場所の公共性・社会性がうかがえます。

ラジオ放送を行っていたNHK佐賀放送局は昭和24年（1949）から徴古館に局舎を移転し、同30年（1955）に同じ松原の商工会館内へ（パネルNO.20の地図参照「放送局」）、同43年（1968）に城内へ、そして新放送会館ができた令和4年(2022)ふたたび松原に戻ってきました。

昭和53年の松原マーケット
佐賀新聞社提供



NHK時代の徴古館
NHK佐賀放送局提供

# 城内エリアに文化施設を新築

**昭和40年頃から城内に図書館・博物館・美術館などが新築され、教育・文化の中核は城内にシフトしました。**

銅像建立を機に鍋島直大公が松原に設立した佐賀図書館は、昭和4年（1929）に佐賀県へ寄附され「県立佐賀図書館」となり、昭和38年（1963）に現在の佐賀県立図書館が新築され城内へ移転しました。

徴古館は、昭和30年（1955）にNHKが商工会館に移転したことで、新たに歴史美術展示を行う佐賀県文化館として活用されましたが、昭和45年（1970）に新設された県立博物館に役割を引き継ぎました。さらに、NHKが松原から城内へ移り（昭和43年）、県立美術館（昭和58年）や佐賀城本丸歴史館（平成16年）が開館します。そして、かつて松原の銅像園の象徴だった直正公銅像は、平成29年（2017）城内に再建されました。

佐賀市役所は昭和50年（1975）に松原から現在地に移転し、公会堂も老朽化により佐賀市民会館が水ヶ江に新築され役割を終えました（昭和41年）。

昭和・平成の新たな佐賀の発展を目指し、歴史・文化施設の多くは松原の地をあとにして城内へシフトしましたが、鍋島家からは昭和38年の県立図書館落成を機に文書典籍資料が寄託され、県立博物館には美術工芸品が寄託されるなど、近代的な図書館・博物館機能を通じて鍋島家資料が活かされました。

松原にあった頃の佐賀図書館
佐賀県立図書館所蔵

# 松原川に帰ってきた河童さん
## ～松原川環境整備～

**江戸時代、城下東側の武家地などに生活用水を届けるために造られた人工河川、松原川。その松原川には河童がいたという伝説があり、松原河童社（かわそう）には河童像が安置されています。**

昭和50年代前半、生活様式等の変化により松原川の汚れはピークに達していました。そのような中、市民のボランティアグループにより、昭和55年（1980）から松原川の清掃活動が始まり、徐々に元の水質を取り戻していきました。昭和61年（1986）には、こうした市民による水の浄化活動などが評価され、佐賀市は建設省からアクアトピア都市（親水都市）に指定されました。

さらに松原川界隈の賑わいを取り戻し、市民の憩いの場となるように、昭和63年度から平成3年度の4年間で松原川環境整備事業が行われました。佐嘉神社角の交番付近からポンポン井樋（いび）までの約750mの区間で、車道を狭めて石畳としたり、水中に竿石を使った親水歩道を整備したり、ガス灯風の照明や石灯籠などを設置して情緒ある雰囲気を創り出しました。整備が進む中で当時の佐賀市長は、かつて松原川にいたとされる河童「兵主部（ひょうすべ）」宛に、「綺麗になった川に戻ってきて欲しい」と年賀状を出しました。すると河童は家族とともに戻ってきて、今も市民を見守ってくれています。

環境整備後の松原川

松原川に帰ってきた河童の家族

# 徵古館の再開

## 鍋島家伝来品の博物館として再スタート

平成に入ると、鍋島家で守られてきた歴史資料を郷土佐賀で活用するため、鍋島報效会では調査に着手し、戦後永らく閉館していた徵古館も平成10年（1998）に約半世紀ぶりに博物館として再スタートしました。

鍋島家の歴史や佐賀の地域史に関する調査研究成果は、展覧会やイベントを通じて発信され続けています。徵古館ではこれまで99回の企画展を開催し、延べ約3,500点の資料をご紹介しました（令和5年3月現在）。

毎年2月から3月には地域のイベントである佐賀城下ひなまつりの会場となるほか、近年では10代鍋島直正公の手紙をまとめた冊子を市内の児童・生徒へ配布するなど、佐賀市との協働事業を毎年行い、歴史的・文化的資産の活用を進めています。このパネル展も、城下の古地図など佐賀藩の歴史を物語る鍋島家伝来資料を読み解いた成果が反映されています。

（上）鍋島家伝来品の展示
（下）佐賀城下ひなまつり開会式　平成28年2月11日

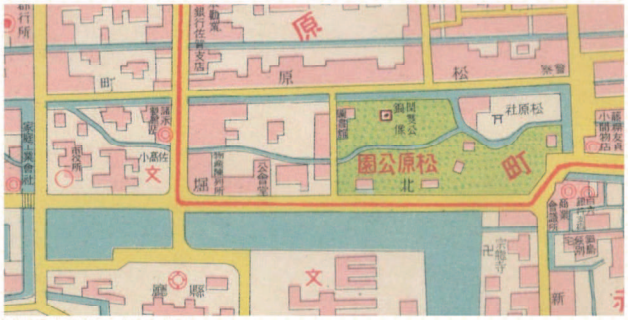
# 松原公園とは？

**銅像園は「松原公園」とも呼ばれ、戦後、神野公園と並び
佐賀市に二つしかない風致地区のひとつに指定され、
平成23年に歴史公園「松原公園」として改めて整備されました。**

戦争により直正公の銅像は供出、台座は移設され、大正～戦前期の松原を象徴した旧銅像園一帯は、戦後は戦地からの引揚者（ひきあげしゃ）の生活の場となりました。

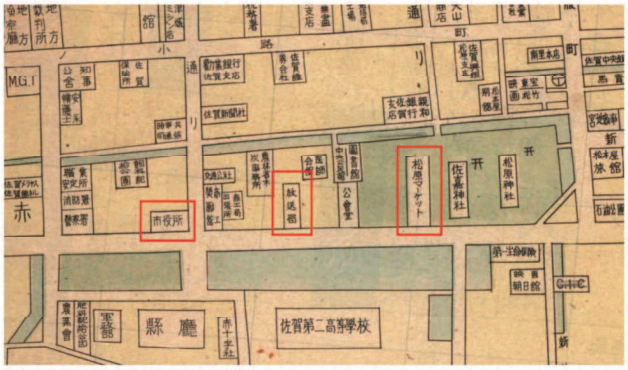
やがて路地に沿って生鮮品をはじめ様々な店舗が並ぶ「松原マーケット」が形成されます。一方、佐賀市は戦後まもない昭和25年（1950）に、「松原公園一帯は各種の樹林を配して市民絶好の散策慰楽（いらく）の地」とし、その保存を目的として、ここを「松原公園風致地区」に指定しました※。

※都市計画決定申請図書　昭和25年（1950）

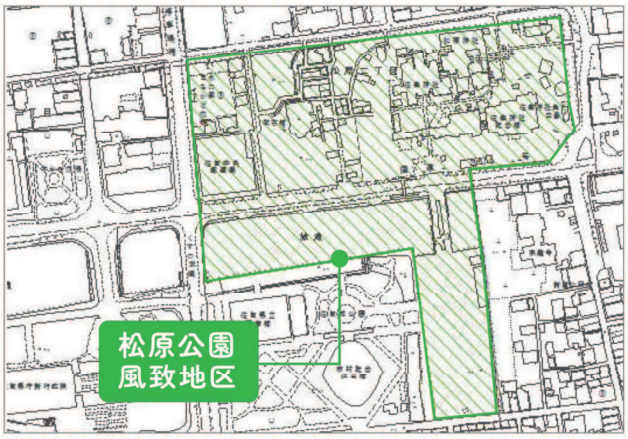


佐賀新市街地図 大正14年（1925）
佐賀県立図書館所蔵

やがて平成に入り、マーケットでは役割を終えた店舗が次第に姿を消し、平成23年（2011）に佐賀市により歴史公園「松原公園」が改めて整備されました。銅像が建立された大正2年（1913）から100年を経て、かつて銅像園を構成していた徴古館や弘道館記念碑の視認性が向上し、植樹により松の樹が松原に戻るなど周辺環境が美化され、人びとが憩う「松原らしさ」が見直されるようになりました。



最新佐賀市内地図 昭和23年（1948）
佐賀県立図書館所蔵



松原公園風致地区位置図

# 佐賀バルーンミュージアム開館

**バルーン（熱気球）をテーマにした
日本初のミュージアムが誕生しました。**

平成28年（2016）10月28日から11月6日の10日間、佐賀市で「2016 佐賀熱気球世界選手権」が開催されました。世界のトップパイロットによる熱い競技が繰り広げられ、多くの観客を魅了しました。佐賀市はその開幕に先立ち、松原に「佐賀バルーンミュージアム」を10月1日にオープンさせました。大空に浮かぶ色とりどりのバルーンを実際に眺めているような感覚で楽しめるスーパーハイビジョンシアターや、バルーンパイロットの疑似体験ができるフライトシミュレーターなど、天候に左右されず、いつでもバルーンを体感できる施設として整備されました。

また、ミュージアムの駐車場の一角には「旧嬉野家の武家屋敷の門（薬医門（やくいもん）1棟）」が残されています。正確な建築年代は判明していないものの、上級武家屋敷の配置形式を伝える重要なものとして、平成27年（2015）6月に佐賀市重要文化財に指定されました。その後、一度解体し、保存修理を行ったうえで平成28年、やや東側の現在地に建て直されました。

佐賀バルーンミュージアム

旧嬉野家の武家屋敷の門（薬医門1棟）

# 松原に神社ができて何年？

**松原神社は250年、佐嘉神社は90年の節目。次の100年に向けて今も「佐賀のお殿様のお宮さん」として親しまれています。**

松原神社（日峯社）は安永元年（1772）の御創建から令和4年（2022）で250年、佐嘉神社は昭和8年（1933）の御創建から令和5年（2023）で90年の節目を迎えました。

「松原（土手）」を拓（ひら）いて日峯社が、次いで佐嘉神社ができ、戦後は宗教法人化という制度改変の波と時勢の混乱により、松原マーケットとともに神社境内も引揚者の生活の場となりました。世俗の空間と神域の整理が完了したのは平成25年（2013）のことです。

佐嘉神社

神社も松原という地域の構成員として、時代と共に変遷を重ねてきました。かつて弘道館が「四方より懸（か）かりよき場所」として松原に置かれたように、神社も拝殿の正面から拝むだけではなく、松原川沿いなど各方面から境内を見通せる、よりオープンな空間とするなど、松原という地域、次の100年という時代と調和する「佐賀のお殿様のお宮さん」として鎮座し続けています。

松原神社

# 松原を次の世代へ

**江戸時代**
上級藩士の屋敷や公的機関が並ぶ格式の高い地区。弘道館が置かれ、次世代の佐賀を担う青少年の声に溢れ、日峯社を核に佐賀の人々が集い、祭りの場にもなった。

**明治～終戦**
「佐賀丸の内」と称された佐賀市役所などの官公庁群と、直正公銅像を核とした銅像園に図書館・徴古館、佐嘉神社が次々とでき、県内随一の歴史文化ゾーンとなった。

**昭和(戦後)**
行政や歴史文化の各施設は城内をはじめ各地へ移転。中央大通りの延伸により佐賀駅・市街地と城内が直線の道路で結ばれた。

**平成・令和**
徴古館の再開、松原公園や松原川の整備など、既存の施設や環境が再活用されるとともに、バルーンミュージアムやNHK佐賀放送局の新放送会館の開館、ARKSの整備など新たな賑わいが創出される。

古今変わらず、佐賀のまちは、北の山と南の海の間に位置しています。北の山を源とする清流は多布施川を通じて城下を潤し、松原川の流路は今も昔も変わりません。江戸時代の北御堀端小路をもとに貫通道路(国道264号)が拡幅されたように、江戸時代の先人たちが築いた水と道のシステムは今も引き継がれています。

変わらない松原の地で、先人たちは何を目指し、何を営んできたのでしょうか…。そして、その営みによりこの地に蓄積された「松原らしさ」とは…。

松原という地名は、龍造寺氏時代の痕跡として江戸時代を通じて保存されたと考えられる「松原」(土手)に由来します。先人の足跡を保存し次世代に伝えることが、地名の由来となっているのです。

龍造寺・鍋島両家を祀るお宮は、今も佐賀の人たちが願いを届け、安らげる空間として鎮座し、境内を囲む松原川は、「水のまち佐賀城下」の中で清流の川べりを歩ける数少ない場所として、楠の古木とともにまちに落ち着きを与えてくれています。

城下で佐賀の先人を祀るお宮はここにしかありません。そのお宮のもつ歴史性や包容性が、銅像・図書館・徴古館・公会堂などの施設を呼び込み、県内随一の官公庁群と文化施設群が建ち並び、行政と歴史文化をリードしたのが近代の松原でした。

つまり、松原らしさとは、佐賀らしさと言い換えることもできるでしょう。かつて弘道館が交通の利点から松原に設置されたように、今も東西を貫く国道と南北に走る中央大通りが交わり合う結節点であり、佐賀駅周辺と城内をつなぐエリアとなっています。

人が通い合い、集い、歴史と安らぎに包まれるという、唯一無二の松原らしさを次の世代に伝えていきたいものです。